

試験研究成果普及情報

部門	資源管理・増養殖	対象	研究・普及
課題名：干潟域における春夏季のハマグリ稚貝中間育成手法の確立			
〔要約〕ハマグリ稚貝の春夏季の干潟育成は、4～5月に平均殻長 2.5 mm 以上で開始し、被覆網で管理することが適当と考えられた。この育成方法により、9月には殻長 15 mm 以上に達し、50%以上の残留率が見込めると推定された。また、被覆網の縁辺部を埋設しない簡便な方法で設置した場合、設置後に稚貝が隙間から散逸したと推定され、干潟と被覆網の間に隙間ができないような設置手法の検討が必要と考えられた。			
キーワード [※] ハマグリ、稚貝、干潟、中間育成、被覆網			
実施機関名	主 査 水産総合研究センター東京湾漁業研究所 協力機関 —		
実施期間	2018年度～2019年度		

〔目的及び背景〕

千葉県のアサリ漁獲量が著しく減少するなか、ハマグリ資源増産のため平成16年度から種苗生産技術の開発を始め、令和元年度には浮遊幼生から殻長 1 mm までの飼育条件を整理し、量産化の目途がついた。一方、殻長 1 mm 以降の干潟域での中間育成(カゴ、網袋など)では冬季に生残率が著しく低下するため、陸上水槽での育成が必要と考えている。

そこで越冬後の春季からの干潟域での中間育成技術を確立する必要があった。

〔成果内容〕

- 平成30年5月28日～9月25日に木更津市盤洲干潟で(1)被覆網(3×3 m, 2 mm 角目, 縁辺部埋設), (2)直播き(3×3 m), (3)鉄枠カゴ(上面φ24 cm, 底面φ19 cm, 高さ17 cmの鉄枠にナイロン網で覆ったもの)の3つの方法で試験を実施し、稚貝の残留率、平均殻長、作業労力を評価した。稚貝は平均殻長 2.6 mm(大型)と 2.1 mm(小型)を使用し、放流個数は被覆網と直播き区画が 77,000 個、鉄枠カゴが 350 個/カゴとした。
- 試験終了時の推定残留率は、被覆網(大型 56%, 小型 28%), カゴ(大型 27%, 小型 52%)が、直播き(両サイズとも 5%以下)に比較して有意に高く(図1)、平均殻長は 15 mm に達した(図2)。以上のことから、春夏季の干潟育成手法は、残留率、規模拡大と管理を考慮すると、被覆網を用いて、育成開始の殻長を 2.6 mm 以上とすることが適していると考えられた。
- 被覆網縁辺部を埋設しない簡便な被覆網の設置方法を検討した。試験は平成31年4月24日～令和元年9月27日に平成30年度と同じ場所で行った。試験区は、(1)縁辺部を埋設した被覆網区(以降、埋設区と呼ぶ)、(2)四方に沈子ロープを装着した被覆網を杭で固定した区(以降、杭固定区と呼ぶ)の2つの試験区とし、両区画とも 2 mm 角目、3×3 m 区画とした。稚貝は、平均殻長 2.3 mm、72,000 個ずつを用いた。

4 試験終了時の推定残留率は、埋設区 19%、杭固定区 1%以下であった。杭固定区は放流1か月後には残留率 10%に減少し、縁辺部の隙間から散逸した可能性が考えられた。終了時の平均殻長は 10 mm 程度で、前年度の同時期より小さかった。これは、令和元年度は長梅雨で気温が低く、水温も低下したためと推測された。今後は簡便な被覆網の設置方法として、縁辺部に隙間ができない設置方法の改善が必要と考えられた。

[留意事項]

ハマグリ稚貝の干潟育成が可能であることが判明したことから、被覆網の簡易的な設置方法を検討しつつ、漁獲サイズまで育成する手法を開発する計画である。

[普及対象地域]

木更津地区、富津地区

[行政上の措置]

特になし

[普及状況]

特になし

[成果の概要]

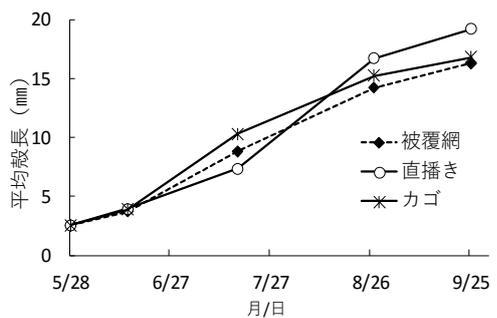
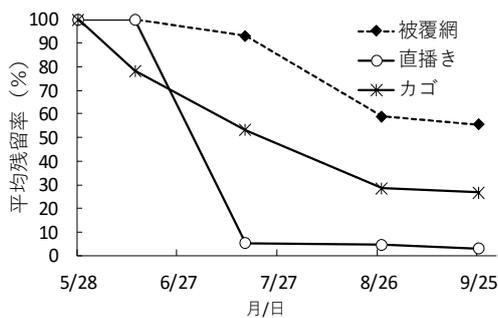
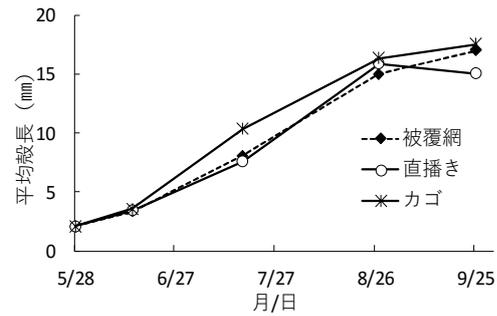
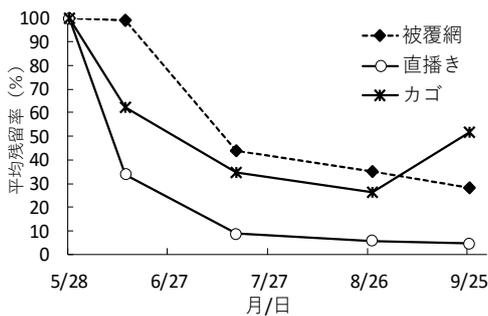


図 1 各試験区における平均残留率の推移.
上：小型 (2.1 mm)，下：大型 (2.6 mm)

図 2 各試験区における平均殻長の推移.
上：小型 (2.1 mm)，下：大型 (2.6 mm)

※残留率 100%以上の場合は 100%とした

[発表及び関連文献]

特になし

[その他]

特になし